

考える力や表現する力を育てる小学校社会科の授業づくり

— 資料の効果的な活用法を基盤として —

林 雅 樹¹

考える力や表現する力を育てるためには、資料活用力を身に付けさせることが重要であると考え。それには、資料活用力を育てるための系統的な指導が必要ではないかと考えた。そこで、各種の文献等を参考に資料活用力を育てる指導段階表を作成した。この指導段階表を生かした資料活用力を育てるプロセスが、考える力や表現する力を育てるための授業づくりに有効であるかを検証した。

はじめに

「平成 15 年度小中学校教育課程実施状況調査」（国立教育政策研究所 2005）で行われた社会科における教師質問紙調査によると、授業の形態の工夫として、調べたことを発表させる活動を行っているという回答が 8 割に達している。

しかし、各種調査では、自分の考えを表現する記述式の問題の無答率の高さが課題として挙げられており、「平成 19 年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査」では、観点別（社会的な思考・判断）の分析の中で、「調べたことを基にその意味や要因などを考え、適切に表現する力を育てる学習を展開していくことが大切」（神奈川県教育委員会 2008）と述べている。

このような各種の調査結果を反映するように、改訂された学習指導要領では、能力に関する目標について、これまでの「調べたこと」に「考えたこと」が加わり、考えたことを表現する力を育てることが一層重視されるよう改められた。そして、「小学校学習指導要領解説社会編」（2008）において、社会的事象の観察、調査とともに、地図や地球儀、統計や年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、考える力や表現する力を育てることについて、このような力は「児童の発達の段階や学習経験に応じて、系統的、段階的に育成されるものである」と述べられている。

そこで本研究では、資料活用力を身に付けさせる授業づくりについて研究を行った。

研究の内容

1 研究仮説

なぜ考える力や表現する力が育っていないのだろうか。それは、資料の活用場面で十分に思考活動や表現活動が行われていないこと、そして、そのような授業

1 藤沢市立富士見台小学校
研究分野（社会）

づくりのための学習計画が十分になされていないことが一因ではないかと考える。

北俊夫（2005）が資料活用力について「資料活用能力の習得状況は、社会科学習の『生命線』ともなる」と述べているように、社会科では単元の目標をしっかりと見据えて、資料を読み取らせ、資料から思考させ、自分の考えを持たせることをねらいとした授業が構築されなければならないはずである。思考活動や表現活動は、資料を通して学ぶ場面が中心となる。よって、児童にそこでどのような力を身に付けさせていくのか、資料活用力を育てる指導の系統性をどのように具体化させていくのが重要となってくる。本研究では、以下のような仮説を立て研究を進めることにした。

資料活用力を育てる指導の系統性を具体化させていくことで、社会科における思考力・判断力・表現力を育てるために必要な指導が明確になり、見通しを持って計画的な授業づくりが行えるのではないかと。

資料活用力に焦点を当てた授業づくりを行うことで、思考力・判断力・表現力も育つと考える。そこで、資料活用力を育てるプロセスを、授業における資料の効果的な活用を生かすこと、ととらえ研究を進めた。

2 資料活用力を育てるプロセス

資料活用力を計画的に育てる授業づくりのために、次の 4 つのプロセスを考えた（第 1 図）。

プロセスⅠ	資料活用力を具体化し、その指導の系統性を整理した「資料活用力を育てる指導段階表」の作成
プロセスⅡ	各種の基礎的資料の資料的価値の分析を行った「資料活用表」の作成
プロセスⅢ	各学年で計画的に資料活用力を育てるための「資料活用力を育てる年間指導計画」の作成
プロセスⅣ	授業の実施 (1) 課題を明確にするための事前調査 (2) 年間指導計画に沿った単元計画の作成 (3) 授業展開の工夫

第 1 図 資料活用力を育てるプロセス

3 プロセス I

資料活用力を育てる指導段階表の作成

「小学校学習指導要領解説社会編」では資料活用力について6つの内容を例示している（第2図）。

3・4年	5年	6年
資料から必要な情報を読み取る。	資料から必要な情報を読み取る。	資料から必要な情報を的確に読み取る。
資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。	資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。	資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。
	複数の資料を関連付けて読み取る。	複数の資料を関連付けて読み取る。
		資料の特徴に応じて読み取る。
必要な資料を収集する。	必要な資料を収集したり選択したりする。	必要な情報を収集・選択したり吟味したりする。
	資料を整理したり再構成したりする。	資料を整理したり再構成したりする。

第2図 資料活用力の6つの内容

（出典 小学校学習指導要領解説社会編）

学年が進むごとにその内容の充実が求められており、学年に応じた資料活用力を育てるための指導が必要であることが読み取れる。

本研究では、資料活用力をA～Fの6つに整理した（第3図）。この6つの内容は、授業場面を想定した場合3つに分類できると考えた。A～Dは、資料から様々な読み取りを行う資料の読解であり、資料活用力の基礎を成すものにとらえた。また、Eは実際に教科書や百科事典等から収集・選択する内容であり、Fは授業で学んだ情報や、観察したり調べたりして得た情報を新聞やポスターなどに整理・再構成する内容であると考えた。

資料活用力の分類

A 情報を読み取る	資料の読解
B 傾向をとらえる	
C 関連付けて読み取る	
D 特徴に応じて読み取る	
E 収集したり選択したりする	情報の収集・選択
F 整理したり再構成したりする	情報の整理・再構成

第3図 資料活用力の分類

次に、各内容を授業場面を想定して明確なものにしていくことが重要であると考えた。

北俊夫は「社会的なものの方や考え方」を育てる指導事項について定義している（1997）。本研究ではこの中から次の三点を資料活用力を育てるための大切な視点として持つことにした。

○事実にもとづいて見たり考えたりすること。

○社会的事象を多面的に見たり考えたりすること。

○社会的事象を比較・関連・総合して見たり考えたりすること。

この視点で、各学年の教科書に掲載されている各種の基礎的資料の分析を行った。単元目標に迫るために、資料がどのように扱われているかに着目し、それを基に各学年で必要であると考えた資料活用力を「求める子どもの姿」としてレベル（段階）に分け、整理をした。「A 情報を読み取る」を例に第4図に示す。

A 情報を読み取る		学年
レベル	求める子どもの姿	
1	資料を読むための基礎知識を持つ	3・4年
2	何を表している資料なのか分かる	3・4年
3	資料から正しい情報を読み取る	3・4年
4	資料からたくさんの気付きや疑問を持つ	4・5年
5	視点を決めて情報を読み取る	5・6年

第4図 A 情報を読み取るレベル（段階）

同様に、B～Fの内容を「求める子どもの姿」に整理したものが第1表の「資料活用力を育てる指導段階表」（以下、「指導段階表」）となる。この表では、資料活用力を身に付けることを通して育つととらえた思考力・判断力・表現力についても示している。

なお、指導段階表の形式については、県内の国語科・算数科研究校において作成された系統的指導のための指導段階表を参考にしている。

第1表 資料活用力を育てる指導段階表

3つの分類	内容	レベル	求める子どもの姿	(思考・判断・表現)	資料活用の指導段階	指導時期				
						3年	4年	5年	6年	
A 情報を読み取る	1	資料を読むための基礎知識を持つ	地図であれば地図記号や等高線・方位の知識、統計やグラフであれば表題・出題・年度をおさえた上で、資料それぞれを正しく読むための知識を習得する段階。			◎	○			
	2	何を表している資料なのか分かる				◎	○			
	3	資料から正しい情報を読み取る	資料ごとに読み取りの技能を習熟する段階。また、資料提示や疑問を工夫して個人やクラス全体で多くの気付きや疑問を持つように指導場面で配慮する。			◎	○			
	4	資料からたくさんの気付きや疑問を持つ					◎	○		
	5	視点を決めて情報を読み取る	課題や設問・テーマにそった視点を持って情報を読み取る段階。					◎	○	
B 傾向をとらえる	1	全体の様子をとらえる	全体的にどのように変化しているか、いつ、どこで何をしているかなど、資料ごとに全体の様子を捉える段階。			◎	○			
	2	社会的な事象の特徴に注目してとらえる	数値の変化や社会的な事象の特徴に注目し、より詳しく内容を捉える段階。				◎	○		
	3	資料から社会的な事象を類推する	1・2を基に社会的な事象をさまざまな視点から見つけ、その理由や背景などについて考えを深める段階。	思考判断			◎	○		
	4	多面的な視点に立つて考える		思考判断				◎	○	
C 関連付けて読み取る	1	資料を関連させて読み取る	資料相互の関係を理解し、そこからより深く読み取りができる。また、比較させることで読み取れる情報の違いや共通点に気付く段階。	思考判断			◎	○		
	2	複数の情報の違いや共通点に気付く		思考判断			◎	○		
	3	複数の情報を総合的にとらえ読み取る	異なる情報を総合的に捉え、社会的な事象を導き出し、読み取る段階。	思考判断				◎	○	
F 情報の整理・再構成	1	分かったことを短くまとめる	必要な情報を要点をおさえた一文（箇条書き）にまとめる。また、集まった情報から重要な内容を見つけ、分類する。 (情報整理の段階)				◎	○	○	
	2	重要な内容(キーワード)を探す					◎	○	○	
	3	調べたことを分かりやすく整理する	表現	調べた情報を新聞やポスターの形で構成し、まとめる。次の段階として必要に応じて文を箇条書きに置いたり、説明文を読み手が分かりやすい言葉に整えるなど、情報や資料を再構成する力を身に付ける。 (再構成の段階)				◎	○	○
	4	図やグラフ、文章などを使って構成する	表現					◎	○	○

4 プロセス II

資料活用表の作成

内容A～Dは、資料を提示して授業を行う際に身に

付く資料活用力である。そこで、各種の基礎的資料には、どのような資料活用力を育む価値があるのかを明らかにする必要があると考えた。今回は必要と考えられる資料を、各種書籍に掲載されたものを参考に「適した資料」として整理した。そして、どのレベルの資料活用力を育てることが期待できるかを「資料的価値」として分析し、指導段階表の内容とレベルを明示した「資料活用表」を作成した。この表を作成することで、資料の効果的な活用法を具体化することができ、授業づくりに役立つと考えた。

第2表は、学習指導要領の5年生の内容2-(2)「我が国の工業生産について」の資料活用表である。

「自動車の部品が分かる解体図」を例に挙げると、A-4、B-3、C-1という3つのレベルの資料活用力を育てる資料的価値があるのではないかと考えた。これは、同じ資料でも活用の方法により異なる資料活用力が育てられると考えたためである。

第2表 資料活用表

2-(2)我が国の工業生産について						
資料の種類	適した資料	資料的価値	A情報を 読み取る	B傾向を とらえる	C関連 付けて 読み取る	D特徴に 応じて 読み 取る
イラスト・図解	自動車の部品が分かる解体図	・自動車がどのような部品からできているかに注目して考えさせると、自動車がたくさんの部品からできていることに気付くことができる。 ・部品の製造に関わる資料と関連させて読み取らせると、幾つもの工場が自動車生産に関わっていることを類推することができる。	A-4	B-3	C-1	
	自動車が組み立てられるラインの図解	・複雑で複合的な工業製品である自動車を、効率的に生産するための工場の工夫を読み取ることができる。 ・機械化された作業（ロボット等）に注目して読み取らせると、生産の過程で機械化が進んだ理由や背景を類推することができる。	A-4	B-3		

5 プロセスⅢ

資料活用力を育てる年間指導計画の作成

次のプロセスとして、指導段階表のレベルを単元目標に沿って年間指導計画に位置付け、「資料活用力を育てる年間指導計画」（以下、「年間指導計画」）を作成した。

検証授業を行う5年生の「工業生産を支える人々」の小単元『自動車工場をたずねて』を例に挙げてみる（第3表）。

ここでは資料活用表を基にA-5【視点を決めて情報を読み取る】、B-2【社会的事象の特徴に注目してとらえる】、B-3【資料から社会的事象を類推する】、C-2【情報の違いや共通点に気付く】という4つのレベルの育成を中心に置いた。このようにレベルの育成を年間指導計画に位置付けることで、5年生で必要とされている資料活用力を1年間の見通しを持って計画的に育てることができると考えた。

第3表 資料活用力を育てる年間指導計画

月	単元名	時数	理解させたい社会的事象	身につけたい資料活用力
『自動車工場をたずねて』では A-5【視点を決めて情報を読み取る】 B-2【社会的事象の特徴に注目してとらえる】 B-3【資料から社会的事象を類推する】 C-2【情報の違いや共通点に気付く】 の4つのレベルを位置付けた。				
10月	1 自動車工場をたずねて (1) 自動車づくりに はげむ人々 (2) 自動車が とどくまで (3) これからの 自動車づくり	4	るとともに、自動車関連工場との結びつきについて気づくことができるようにする。	取れる社会的 な目し、より詳 細な情報を 集め、社会 的な事象を 導き出す ■ 真なる 情報を総合 的に読み取 り、社会 的な事象を 導き出す ■ 統計資料や図解など異なる資料を関連させたり、比較させたりしてより深く読む。 C-2
11月		4	○完成した自動車を運ぶ仕事を通して、輸送に携わる人たちの工夫や努力、願いをとらえるとともに、工業生産を支える運輸のはたらきに気づくことができるようにする。 ○自動車に乗る人たちの願いを通して、「安全で、人や環境にやさしい」自動車づくりが進められていることに気づくことができるようにする。	■ 資料や情報を利用して理由や背景などを想像し、考えを深める B-3

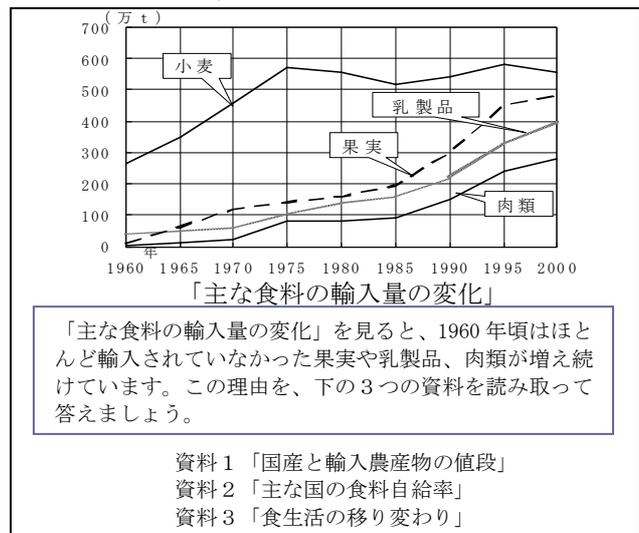
6 プロセスⅣ

授業の実施—検証授業より—

(1) 事前調査

検証授業は所属校の第5学年3クラス（102名）を対象に、小単元『自動車工場をたずねて』（11時間扱い）を通して行った。この小単元で育てたい資料活用力であるA-5、B-2、B-3、C-2の4つレベルがどの程度身に付いているかを実態把握するために、平成15年教育課程実施状況調査を参考に作成した問題を用いて、対象の全児童に事前調査を行った。問題の形式は選択式15問と自由記述式2問の計17問である。第5図に自由記述式の問題を例示する。

自由記述式では、説明文とグラフから、解答となる情報を含む3つの資料（表題のみ記載）を読み取り、それぞれの資料の内容を理解し、関連させて答える問題とした。自由記述式で解答させることで、資料の読み取りの様子を詳細に分析することができ、課題が明確になると考えた。



第5図 事前調査の自由記述式問題

(参考 農林水産省食料需給表)

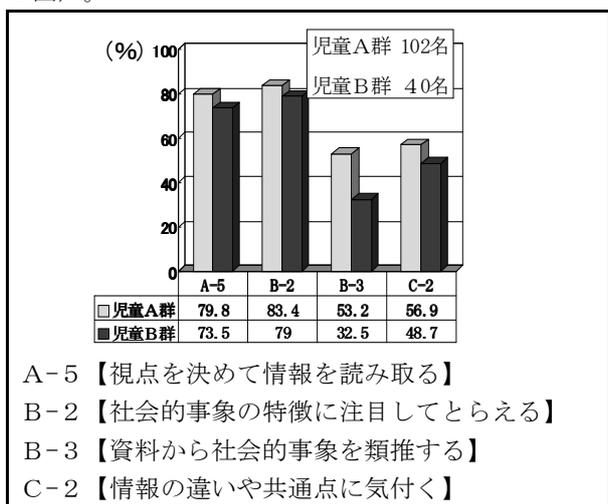
児童の実態と課題を以下のように整理した。

選択式 15 問の結果では、資料の示す全体の傾向や特徴に着目して解答する問題の通過率は高い。しかし、資料の数値等の情報を細かく正確に読み取る問題では誤答が多く見られた。A-5、B-2 は 8 割前後の通過率であったが、誤答の多くは正確な読み取りを求める問題となっている。

また、複数の資料を比較して読み取り、情報の違いや共通点に着目する問題 (C-2) や、文脈から判断して解答を導く問題 (B-3) については、選択式でも通過率が低い結果となった。

自由記述式の 2 問でも同様の傾向がみられ、資料から具体的な情報を導き出すことが出来ていない解答が多く見られた。また、解答内容が不明または無回答であった児童 (2 問中 1 問でも不明・無回答であれば含む) は対象児童 102 名中、40 名であった。

記述式に課題のある 40 名について、対象児童 102 名との課題を比較する必要があると考え、対象児童 102 名を児童 A 群、記述式に課題がある児童 40 名を児童 B 群として選択式の問題の通過率について比較した (第 6 図)。



第 6 図 児童 A 群と児童 B 群の比較

4 つのレベル全てが児童 A 群に比べて低いことが分かる。資料の数値等の情報を細かく、正確に読み取ることができない児童が多く、特に低い B-3 については、文脈に含まれる情報を読み取る力に課題があるため、正答を導き出せないのではないかと考えられる。

これら児童 B 群の課題を明確にすることは、系統的な指導を行う授業づくりにおいて重要であると考え。2 つのグループ (児童 A 群・児童 B 群) に共通して課題となっている B-3、C-2 を育てる指導を行うだけでなく、前段階 (B-2、C-1) や、A-5 の指導も意識的に行う必要があるということである。課題となるレベルを見据えて前段階の指導を行うことにより、重点を置いた課題の指導が充実するはずである。

(2) 単元計画の作成

今回は事前調査で課題となった B-3 【資料から社会

的事象を類推する】、C-2 【情報の違いや共通点に気付く】に重点を置いた指導を行う単元計画を作成した。

単元計画に位置付ける資料については、単元のねらいに沿って、資料活用表で示したレベル (事前調査で課題となった B-3、C-2) に当たる資料を中心に選択を行い、授業場面では系統性を重視して、前段階 (資料の読み取りに重点を置く等) の指導も意識的に行うこととした。

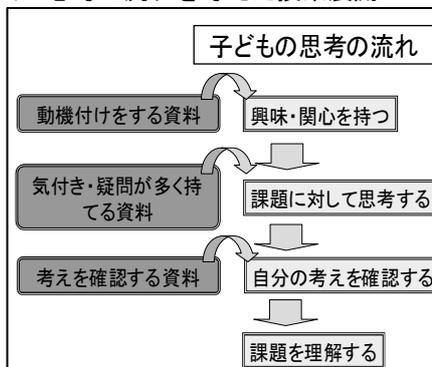
(3) 授業展開の工夫

事前調査で課題となった B-3 や C-2 の資料活用力は、指導段階表では思考力・判断力を育てるのに重要なレベルと位置付けているため、以下の 4 つのポイントをおさえた授業展開を考えた。

- 思考の流れを考えた授業展開
- 興味・関心を持たせる資料の提示方法
- 資料を吟味するような発問の工夫と思考の時間
- 自分の考えをノートにまとめる活動や、それを基に話し合う活動場面の設定

「安全な自動車づくり」(8/11 時) を例に、上記の 4 つのポイントに沿った授業展開について解説する。本時では、安全な自動車づくりに取り組む人々の思いをとらえさせることを目標に据えている。以下ア～エに実際の授業づくりについて具体的に述べていく。

ア 思考の流れを考えた授業展開



児童はまず学習課題に対して興味・関心を持ち、その課題に対して思考し、自分の考えを確認することで学習課題を理解する (第 7 図)。

第 7 図 思考の流れを考えた授業展開

資料は授業の中でこの流れに沿って提示され、展開されることが重要であると考えた。

イ 興味・関心を持たせる資料の提示方法

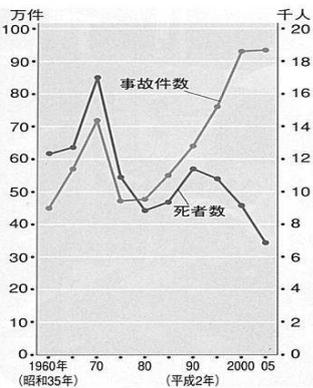
今回使用した「交通事故件数と死者数の統計」のグラフを第 8 図に示した。この資料の特徴は 1990 年を境に事故件数と死者数が異なる変化を示すことである。

これは C-2 【情報の違いや共通点に気付く】を育てることができる資料的価値があり、そこから日々安全な自動車づくりが行われているのはなぜかという B-3 【資料から社会的事象を類推する】を育てることにつながると考えた。

授業の中では、まず事故件数のグラフだけを扱い、グラフの読み取りや変化の特徴について考えさせた。

その後、死者数のグラフを併せて提示し、減少の部分を隠してそのグラフの変化を予想させた。資料の読み取りを丁寧に行うことにより、C-2、B-3の指導が充実するのではないかと考えた。

ウ 資料を吟味するような発問の工夫と思考の時間



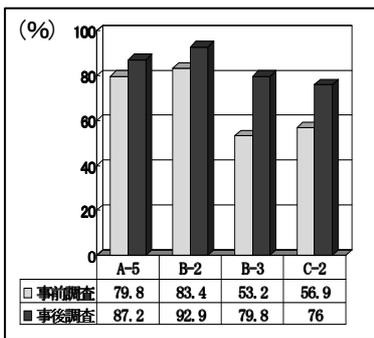
第8図 交通事故件数と死者数の統計

(出展 小学校の社会科5年上日本文教版) 死者数が減少していることを示した後、死者数が事故件数とは異なる変化をしている理由を考えさせる発問が重要になってくる。ここでは、「事故件数は増え続けているのに、どうして死者数は減っているのだろう。」と発問した。目標に迫るだけでなく、自由に予想し様々な意見が出る発問であることが、B-3【資料から社会的事象を類推する】を育てるのに有効であると考えた。また、児童の思考の時間に留意し、資料の読み取りや、自分の考えを深める時間を確保することも重要であると考えた。

エ 考えをまとめる活動・それを基に話し合う活動

ウとあわせて、資料から気付いたことや予想したことをノート等にまとめる活動や、それを基に話し合う活動を意図的に設けた。これにより、児童同士が同じテーマについて関わりを深め、思考力・判断力・表現力が育まれていくと考えた。

7 検証授業の結果と考察



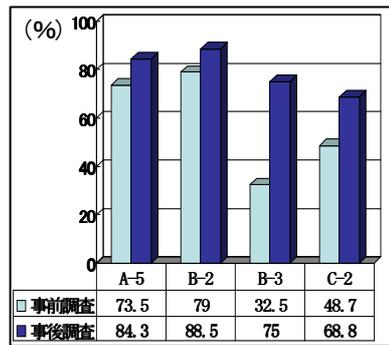
第9図 事前・事後調査の比較

検証授業終了後、同第5学年の児童に対して事後調査を行った。通過率の変容を見るために同質の問題を設定して調査を行った。A-5～C-2の4つのレベルの事前調査との比較を第9図に示す。

4項目(レベル)とも伸びが見られ、その中でも課題であったB-3、C-2の変容が顕著であった。

次に、注目した児童B群の変容について、第10図に示す。

4項目(レベル)とも伸びが見られるが、その中でもB-3が40ポイント以上の変容を示している。これは資料の読み取りや、思考の時間を十分にとるなど、事前調査で明らかになった児童B群の課題を意識して指導を行った結果ではないかと考える。具体的には、

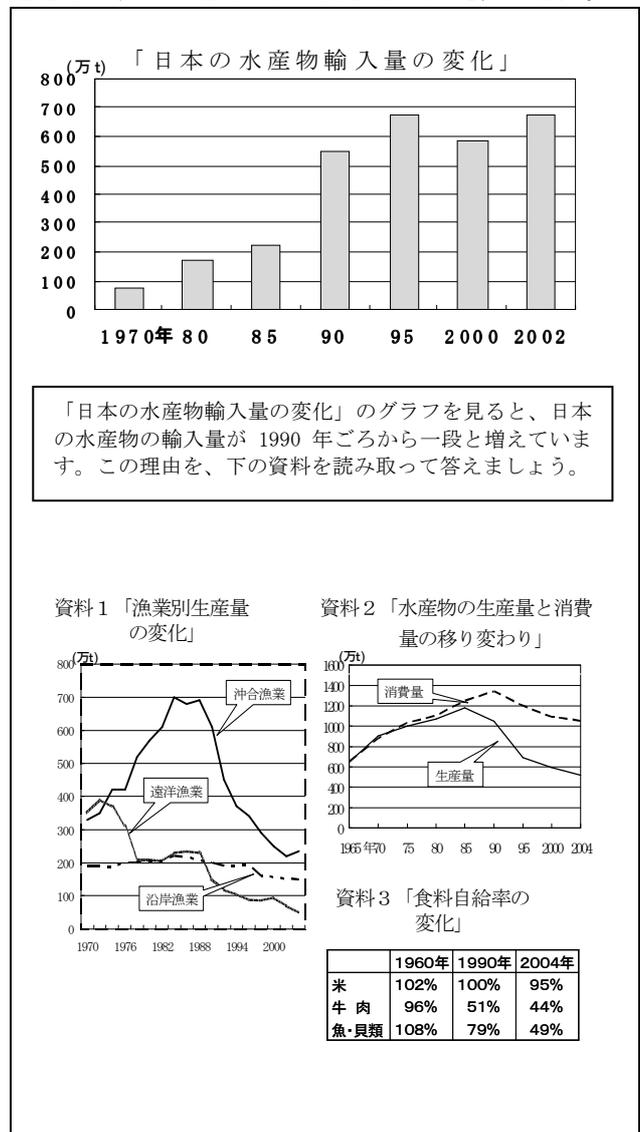


第10図 事前・事後調査の比較 (児童B群)

授業の中で常に表やグラフの数値の変化に注目させ、その理由を考えること、また、予想との違いを考えること(意見交換や話し合いの時間を十分に取る等)などの指導を行ったことが考えられる。

次に、自由記述

式の解答の変容について2つのグループからそれぞれ数名の抽出児童を選び、その変容を分析した。ここでは事前調査で無回答であった抽出児童アと、資料から具体的な情報の読み取りが不十分であり、B-3とC-2に課題があった抽出児童イについて、問題(第11図)とともに、その記述内容の変容を示す(第12図)。



第11図 事後調査の自由記述式問題

(参考 農林水産省食料需給表)

	抽出児童ア	抽出児童イ
事前調査	(無回答)	今、日本人の消費量がふえていて、日本より外国の方が食料のねだんが安いので輸入している。
事後調査	<u>1990年ごろ</u> ④から、沖合漁業の量が少なくなってきて足りないため外国から輸入量が増えてきた。 <u>1990年から魚・貝類の自給率もへってきて、2004年には49%になっている。</u> ④だから輸入量が増えている。	日本の漁業生産量が1970年から2002年にかけてすごくへっている。それなのに消費量は高くなっている。 <u>魚・貝類の自給率が1960年から2004年にかけて二分の一ぐらいになっているのはその表れだと思う。</u> ④だから輸入量を増やさなければいけない。

第12図 抽出児童の変容

抽出児童アは水産物の輸入が急に増え始めた1990年に着目し、資料の読み取りを行っていることが確認できる。資料3を読み取る際も、水産物に関連する「魚・貝類」の統計の読み取りを行い、輸入の理由を説明することができている(下線部④)。資料から具体的な情報を読み取る力が付いてきたといえるが、3つの資料の持つ意味を理解し、解答するまでには至っていない。

抽出児童イは、3つの資料を正しく読み取った上で、資料同士の関連を理解して解答している。読み取った情報を基に、それぞれの資料の持つ意味を考えて、輸入が増えた理由を自分の言葉にまとめることができている(下線部⑤)。よって、抽出児童イは課題であったB-3とC-2が身に付いてきたと考える。

また、事前調査で40名であった不明・無回答の児童数は事後調査の結果14名に減少していた。

以上の分析から、資料活用力を育てる指導を系統的に行ったことにより、児童の課題に応じた資料活用力の向上が確認された。

8 研究のまとめ

(1) 研究の成果

資料活用力を育てる指導の系統性を重視した指導計画を立てたことにより、思考力・判断力・表現力を育てる指導を見通しを持って計画的に行うことができた。

これは、各学年で必要と考えた資料活用力を指導段階表に整理したことで、児童の課題が明確になり、資料活用力を育てる4つのプロセスを経ることで、有効な指導が具体化できたことによるものである。

また、系統性を重視したことにより、前段階の課題を意識した指導が可能となった。その結果、選択式の

通過率が児童全体で向上し、とりわけ児童B群の通過率を大きく向上させることができた。そして、自由記述式の問題についても、事前調査に比べ、記述内容の充実が確認された。

以上のことから、資料活用力に焦点を当てて授業づくりを行っていくことは、思考力・判断力・表現力を育てる一つの手立てとして有効であったと考える。

今後も同様の指導を継続して行っていくことで、着実に一人ひとりの児童に資料活用力が身に付くと推察する。

(2) 今後の課題

自分の考えを文章に表現できる児童を育てるためには、個に応じた指導が併せて重要になってくる。今後は指導段階表を踏まえ、表現力の向上にも重点を置いたワークシートやノートを活用した指導の工夫も必要である。

また、指導段階表については、十分な検討がなされていない部分もあるので、今後も検証を重ねて修正を行っていきたい。

おわりに

事後調査の結果とともに、児童の資料に対する姿勢の変化も感じられた。積極的に資料に向き合う姿が多くみられるようになり、何を訴えかける資料なのかを探ろうとする児童の姿からは、資料の持つ限りない可能性を改めて実感した。

今後も、各種の基礎的資料を授業づくりの視点で分析していき、よりよい授業づくりについて探っていきたい。

引用文献

- 国立教育政策研究所 2005 「平成15年度教育課程実施状況調査 教科別分析と改善点」 (http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h15/H15/03001040020007004.pdf#search (2008.7.7取得))
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編』 p.20、p.50、p.72
- 神奈川県教育委員会 2008 「平成19年度 神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査 結果のまとめ 小学校」 p.16
- 北俊夫 1997 『生きる力を育てる社会科授業』 p.20
- 日本文教出版 『小学生の社会5年上』 p.72

参考文献

- 真鶴町立まなづる小学校 2007 『生きる力を支える確かな学力を育む授業の創造』
- 農林水産省食料需給表 2008 (<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/inex.html> (2008.7.9取得))